「おじさん、こんど、あめ屋さんになったの。」

正ちゃんは、顔なじみの紙芝居のおじさんが、きょうは、 あめのはいった箱をかついできたので、 目をまるくしました。

「ほんとうだわ、おじさん、あめ屋さんになったの。」と、花子さんもききました。

「ええ、あめ屋になりましたよ。」

「どうして?」

「紙芝居がたくさんになって、話では、はやりませんから、これからあめで、 なんでも造りますから買ってくださいね。」と、おじさんは、 いま

そこへ、英ちゃん、誠さん、年ちゃんたちが集まってきました。

「おじさん、さるでも、たぬきでも、なんでも造れて。」

英ちゃんは、不思議そうに、おじさんの顔を見ました。

「いつ、おじさんは、けいこをしたんだい。」と、誠さんが、ききました。

「おじさんは、もとから、このほうがお話よりもうまいんです。」と、おじさんが、笑いました。

正ちゃんは、お家へ駆け出してゆきました。年ちゃんも、つづいてゆきました。 お母さんに、おあしをもらってくるためです。そのうち正ちゃ

んは、にこにこしながら、もどってきました。

「なにをこしらえてもらうかな。」と、正ちゃんが頭をかしげました。

「正ちゃん、うさぎがいいだろう。」と、誠さんがいいました。

「うきぎなんか、つまらない。それよりか、象がいいな。」

「ああ、 象がいいわ。」と、花子さんが、いいました。

正ちゃんは、動物園で見た象のことを思い出して、それがいいと思ったから

「おじさん、象をこしらえておくれよ。」と、おあしを渡しました。

「はい、はい、象をこしらえますかな。」と、いって、おじさんは、あめを管の先につけて、まるめたり、 吹いたりして、やっと一ぴきの象ができ

上がりました。

すると、これを見た、子供たちは、 笑い出しました。

「おじさん、これが象なの?」

「象と見えませんか。」

「鼻が足みたいだ。」

「尾が、あんまり大きくて、みっともないよ。」

みんなは、げらげら笑い出しました。おじさんは、きまりが悪くなって、

「象は、下手ですから、なにか、ほかのものを造ってあげましょう。」といいました。 けれど、 子供たちは、 もう、

信じませんでした。

お話がいいね。」と、みんなが、賛成しました。

「おじさんは、やはり、お話がいいよ。」と、年ちゃんがいいました。

話が上手で、 夏の白い雲がうごく、空の下の原っぱで、子供たちは、おじさんを取り巻いて、 目に見る気がしてみんなは感心してきいていました。 お話が終わると、 かわいそうな子供のお話をききました。 おじさんは、 あめを分けてくれました。 絵紙はなかったけれど、

おじさん、たぬきや、 象をつくるより、 よっぽどお話のほうがおもしろいよ。」

゙もう、そんなもの、つくるのおよしよ。」

「じゃ、また明日から、紙芝居の道具を持ってきますかな。」

僕たち、 ほかの人のをきかないから。」

゙ありがとうございます。」と、 人のよいおじさんは、喜んで、箱をかついで、 お家へ帰りました。

どんなに、おじさんは、やさしいみんなの心を、 ありがたく思ったでしょう。

「定本小川未明童話全集 10] 講談社

1983 (昭和 58) 1977 (昭和 52) 年1月 年 8 月 10 日第 1 刷発行 19 日第 6 刷発行

※表題は底本では、「夏の晩方あった話」となっています。

2012年5月6日作成校正:仙酔ゑびす

青空文庫作成ファイル2012年 3 月 6 日作成